[illegible]漫畫　八

へ 13
2906
8

春暁八幡佳年三編巻之二

江戸　爲永春水著

第十五章

水の流れと人の身の行末も淵ハ瀬とかハる浮世の祥瑞不吉深川の梅吉が今にかけても忘れぬ白木の店の新吉ハ上方の支店へ出世なしたる後ハ[illegible]他者の私欲をせしかども柳吉ハ[illegible]それとハ不分解[illegible]の不屆[illegible]

へ 13
2906
8
昭和九年七月五日購求

く前借に至れ之再勤もかなひがたく亦上方の文死人別家して在ける者の其中に実否といふ人なりしが此者は柳營に勤め居たりしが後年再度鎌倉へ下りしく出精をすゝめ上方の内にて一躰の子母にあづけあるなりしてくて随分とあしたに一度のものにあるべしと思ひまづ目出度よろ分別して其身の隠居所へさし遣て主人なぐさめに外の支配人の立様の逆りなれば其府再勤させて流れてへしと懇切に世話をさせ主従人方の其向ひと渡くりける時の耕く

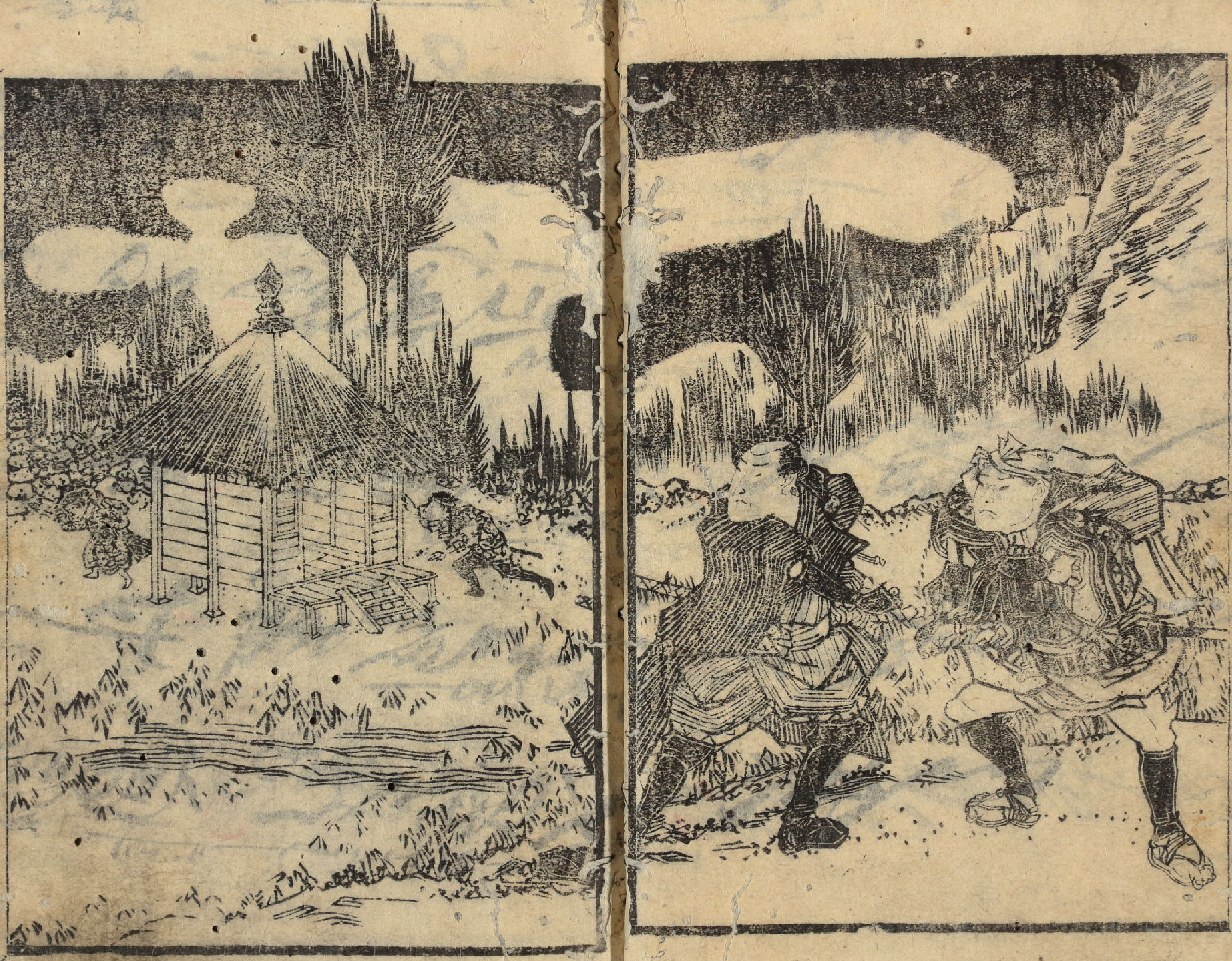
と常々申して幸ひ菅家の慈悲深きをうかゞひて三千歳の手習ひ世に出て世俗のうんぬんて奉業向きて忠入いて給に随ひ立退きし此内に実否方にありて半年ばかり過ぎしけるが其中にも梅王丸の子のと桜丸が生後年実否の様子をさらにぬ事ゆへ聞ひて鎌倉へ下りまづ思ひ居る所に実否の皇国実否は箱根の温泉所にて湯中の正否といふものありしが今の正否は実否が…所在年々妻…

むづかしく是非十右衛門下りしかるにたよりなくば[illegible]
ある[illegible]下しく浅くの身をも[illegible]より経衛を[illegible]せて
うべ実[illegible]●わかれのせんとおもひけれども今年の春の頃より[illegible]
まへ万事その身のまゝにて一日もまかせずして殊に老人
も病気なれバつよく箱根へ下りなんどしてとうりうせしがやうやくに
思案しく彼[illegible]書を留守に頼みて[illegible]の始末[illegible]
よあの[illegible]一家に[illegible]まかせ[illegible]も[illegible]
封[illegible]しておもはく相続の沙汰あるべしと[illegible]

さて路用なくば我身の方への病気見舞として金子十両
を渡しけれバ飛脚と倶に支度をし相模路さして下る
みちのうちも[illegible]梅沢の[illegible]にて[illegible]
旅は幸ひよ花の盛りは[illegible]二人連箱根
の湯本へいそぎしが同敷[illegible]今[illegible]より箱根の山路
みさしかゝりをおし村[illegible]ありしかど案内知れる[illegible]
御ともひ[illegible]男なれバ夜道なんども恐るゝ
ことなく[illegible]にて小田原より[illegible]重なりし

荊からたちのとげもいとはず近道纔に夜の中に湯本の
方へさしかゝる爰は名におふ箱根山弥吉はこゝに来て南無何と
せう物すさまじく森々たる樹木茂りて晦き谷に迷ひける
うち見ゆる天下を流るゝ清水の月の光り紙底に漏して来る
くまなく照らしてめぐらしてゐるにほどなく暁の蒼白
きにほどなく谷の間や山の腰草木おくも出で来る弥吉も
まくらに懸けぬ女の姿あらはれけるが名を弥吉へ
来たりけり　弥「ヲイ宗八さん何ぞかのすがたが出来た
出世アリ素性がヨカツタか　宗「きこえたサどうも合点がゆかぬ
旅人そうして此辺の家も何も旅人もございます　弥「旅へ行く
他の所を通る方がいくらもあるが旅人か　宗「十二所権現しく路へ
ゆるあんぞといふそのこなたの山鞍ぞいませせん
とくに何かあるとも二人連でゐるのではとん旅人か
もん　弥「アヽ腰く姿が近くあるが　宗「ハテナ
匂ひが根でもうさらつて来ると見ゆるかひそうな声がし
女中じやアあらく狐なるもあるや世界に依て助けて

いつも後生のためぞそして向ふの如き悪徒中済すござらう
手燭へさしかゝりやア此方共も手出し致し住持へあのごくも
猿へかゝる其気で往やせう　新「エゝ是は又気がつかねへ人々の紙
して殊ふぢや夫ならば左様致しましよが向ふでも承知して通
しまふのさ　宗八ナニノ弱に依りやア一家ぐるみ切倒
もの事やさアあるト落着の宗八が先に立て柳蔭へいそぐ
あかり標みさしさる提灯の柄紙提つて付添多く小僧
茅原町上にもまさき沢辺の麓井戸紙うけつ既に一丁
隣り近づきさいごつく涅槃の要ある方は伺ひ又は芽
脚の一延辻堂の廻りをぐるぐる違ひ手よ一人ならず
うまく食ます追ひなくたい大男のさも知らずに風情又
よりさまはず男は前後無念にて見ごとに済へんと
いきまき荒く罵り娘は一生懸命に泣叫びつゝ逃
まはる歎きの声を聞付る宗八さては推量にたがはず
ぎりし何所の娘か知らねどもさぞ悲しくもありつらん
ドレ助てやらうべいしと独言いひつゝながら曲者の顔の辺



[illegible]一声呼んで切てかゝれば藤浪は仰天なして逃出せ[illegible]の[illegible]で逃かくれば追[illegible]と追人ハ見[illegible]て[illegible]切結ぶ風情を見るより[illegible]悪[illegible]かゝりて[illegible][illegible]として助太刀するぞが元来[illegible]の賊[illegible]二人の者ひとりに[illegible]ありしく[illegible]家八[illegible]実[illegible]の[illegible]と切かくる[illegible]賊も家へ[illegible]見[illegible]らし[illegible]の[illegible]二人が[illegible]飛[illegible]て[illegible]周章ふためき宗八は[illegible]にげんと[illegible]所[illegible]と[illegible]東や[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]りて[illegible]の口[illegible]下しがたくいそんや[illegible]下すべき[illegible]も見へざ[illegible]見れば途方にくれし[illegible]の[illegible]月[illegible]ども[illegible]ぞ何[illegible]さうして[illegible]せしが[illegible]やうくと心付以前の辻堂のうへまで立かへりて見れば女は[illegible]かゝりうちふるへく私もその所に[illegible]て待居れば[illegible]中で[illegible]側へ[illegible]寄り柳「コレ女中さん今お前は難儀を遁れ[illegible]て居る奴原へ[illegible]難儀へ[illegible]女「ハイ[illegible]

ぞ何のゑんなさいまし　柳「ナニサ手短かにいへバ是ハ旅人ハナア
道中人足ぬすびとの連の男が追かけて八谷の方へ逃さつたら
きつく気の毒がりし旅人ヨアア是非なく此方に理を言て
しるべ頼みけるゆゑ是からお前の宅まで送つて
やらうとお前の事何所のお人だへと聞けども娘ハ柳屋と計
答へて後ハ何もいはねへゆゑ　柳「コレサ娘ハ
ぐつすり寝てもいるヨどうして此人に出合たのだ　主
何と言ふも今日母の墓の帰りで其夜道を湯本まで

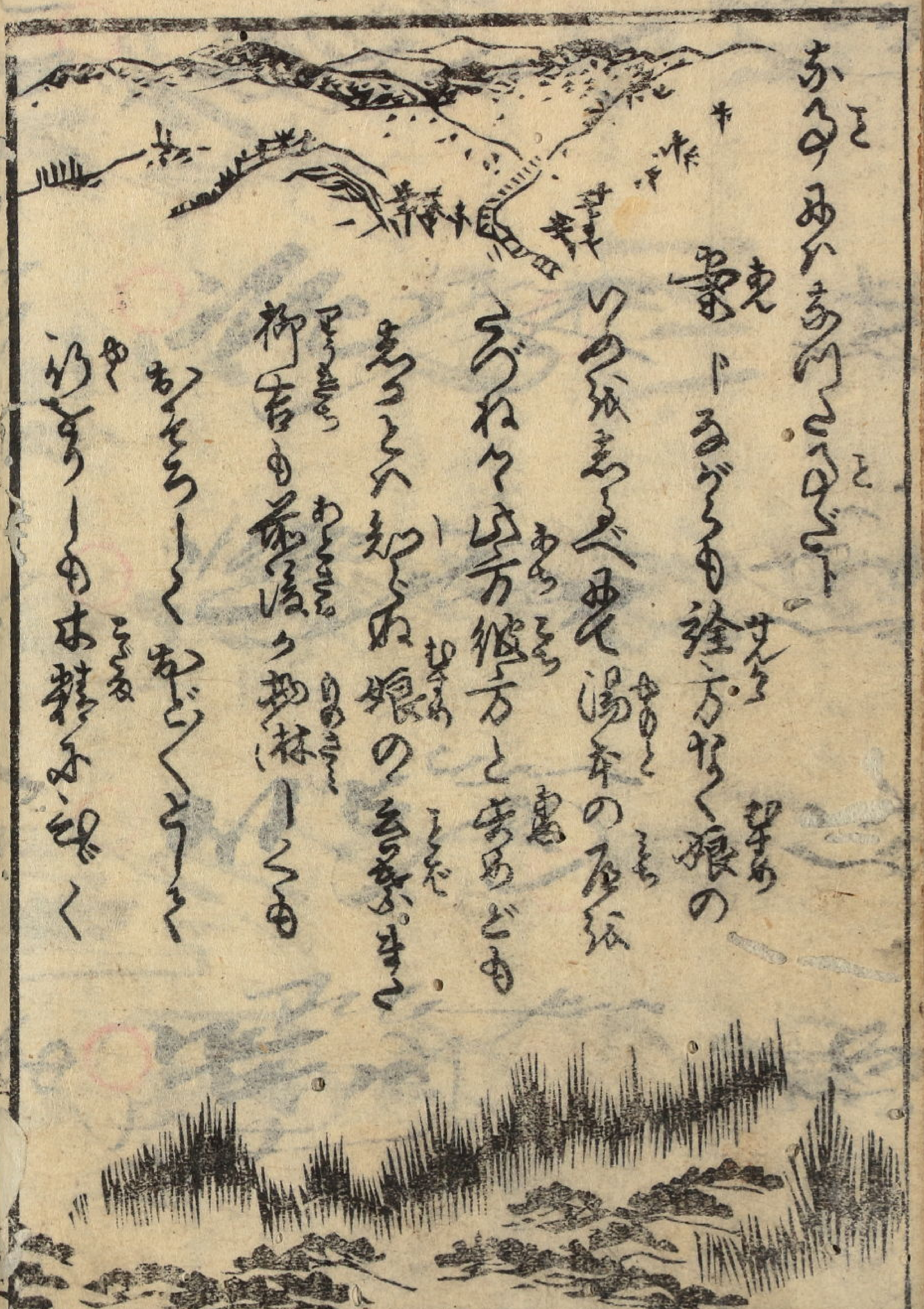
帰のぢがかりもそうでござりますお前の身とまをいてゆくのぢ
早其理をさるしで早く宅へ送つてまへらすが能いぢやアねへか
けふまでゆうく来たけれども月の明りに柳屋までつれてこねへかと
たしかに悪漢ハわるさする姿で来ないとも心細くて一
これハマア有難うござりますお気の毒になさるべうぞ是非く
此所へ連て退いて御無沙汰しまし私の身の上のことハ途中で聞き
中までよくまあ　柳「あらあれどもそれを知らずに此所を退いて送つてきた
柳「マアお前の宅とハ何方だ親仁の名は何といふ所

手前どもが笑ひ人はまだ逢られませんでして参りました路を
聞て見ますと　女「アノウ実正の事は存じませんが湯本へ行く道を
お尋ねなされますから湯本より大略は聞て
居ます　折「イヤ其以前は連の人が知て通るので自己は始
めて承りし事故私が御家の聞で同じく湯本の
方へ　女「アイ湯本庄右衛門といふのが私の兄でござりますが
折「エヱ湯本の正右衛門さんといふのは兄さんでござんす夫じやア
手前へはお姉さんといふ名を　女「エ何程して四ヶ様でござんせん

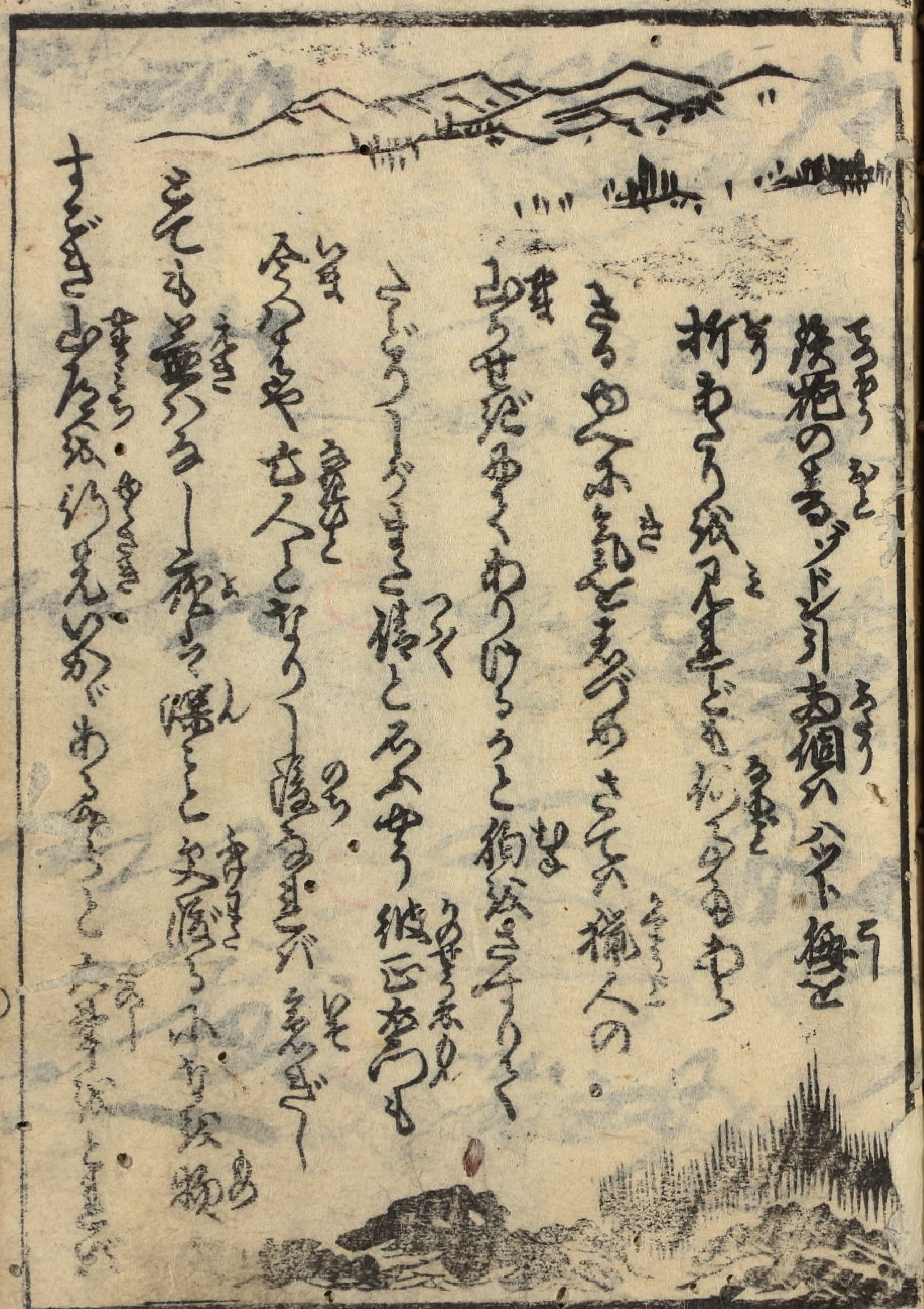
折「ヱサ其方へいふ事不思議正右衛門さんの
下千代その小柳吉の
かれ侍があるる
も知己なれあらざるが正右衛門さんの病気まで貴さ家
私の実意さんの名代に私が下りて来たのサ今
盗人は追出て其名は上方へ飛脚に出て宗八と
いふ人でアナ　女「ヲヤ〳〵そうじやアお前さんは京の兄さん
の名代にお出なさるの文殊にアヽふしぎな事で
ござんすもねへ何ぞろモウ義のそうなもので実正の
事でござりませんヨト様さ中に疑ひあるか御

吉の家は備しなづかなく浦島也防くわりきあいは見び
寄ところを見ちう男も娘はよく見まへバ年頃は十九
だかりやあるうとおもひ見つ屏そつろしき見へしき夜間
まへいとで色白く山家育の娘とは見えぬ おかみおめひも
うらやむ放逸するやど此娘とも好る気色の雅氏
の中より此風情は住しく見も大きくと光りしづまお
後は考て言つどこまり
宗八は姪く立去かるけ義理あれども庵中と
いひ妻門も知ませば詮方なければまづ此儀を取
ひそく其宅へ送りとゞけましくれバ八
とゞさづけて下し且盗賊が再び来るまじき
事もあらぬ其身は浪人なれども落を極め
娘の手紙より推量は私が知りといふ言葉を復り
ゆるしても足手たくも足はなわらく露延くおりのえも
中々うつかりし是へ手を引るなく柳下
さんの此病気はすこしも宜ござい升せぬとて娘

当事をサ　ハイく　エ　兄さんハ丁度七日以前に死去致しまして何程
も珍らしい方が来られたら近所のお方の世話で程なくお寺へ送れん
で亡くなる家の兄さんがお出でなさるから毎朝の弔ひをすべ
まず不憫に存るのでございますが今日ハ七日でござるからお寺へ
私一人で参りまして拝んで居ますと今の若衆の云ふハ侍が来
て私を引抱へて御墓所から山里へ連れて今の所へ
連れて来て置かるゝ御主が横れつゝありて上方のかくへ
歩行女郎にすると宜い所へ売出して出世をさせるとの
の仰のとき家へ下されしものを喜びて居ますれば
初めて目にかゝるからアノ御堂の廻り補するまへ
と逃て歩いて居る所へお前さん直ぐにお救ひなされ
助かりましたのでございますヨ　将「イヤハヤそれハ大きな訳
ござるし家敷の兄さんの使に来て私がお前を助ける
とハ是も不思議な因縁でござりますさぞ乳母の宅で
大きに案じて居るであろうアノ兄さん一家八どのも嘸
我が来なければいつが為く待るみも無念ハ忘れずびようん



ありのまゝにいひきかせど
家ドおやども途方なく娘の
いのちをすつべく思ひ湯釜の底に
しづねゝ彼方此方とあらそへども
ありとあらぬ娘の思案にまよふ
御吉も藥湯ヶ物淋しくも
おそろしくおどろくほどに
ゆすり一ツ本精をつくし



疾病のあるゾドツ引あ頼ハハヤ毎を
折あとり絞りあげてもおそろしかる
きるゝ不氣をさへあるさて又職人の
此世渡りむづかしくありけるに御縁有て
ぶきようもの清と云ふ者か彼正妻つきも
今のみや古人とおもひ渡をうまれそのまゝ
それも兼ねて經て湯を実屋にかり親類
すゞきにも身代がゝあるのみにて

放蕩とも申べき男女連にては往来の者の目をさます
わるくば夜の明るまで仲よくなし盃にてあそばあのげで
東都にては業にもわるき遊びゆくての右たり纏足
おそらく気を付ければ杉の木まえにあるさの紀室が
ありけるはこれ幸ひとやすまず縁まえとぞしける
ひける

第十六章

斯くその夜も明渡り出店るがうち湯本への小田原

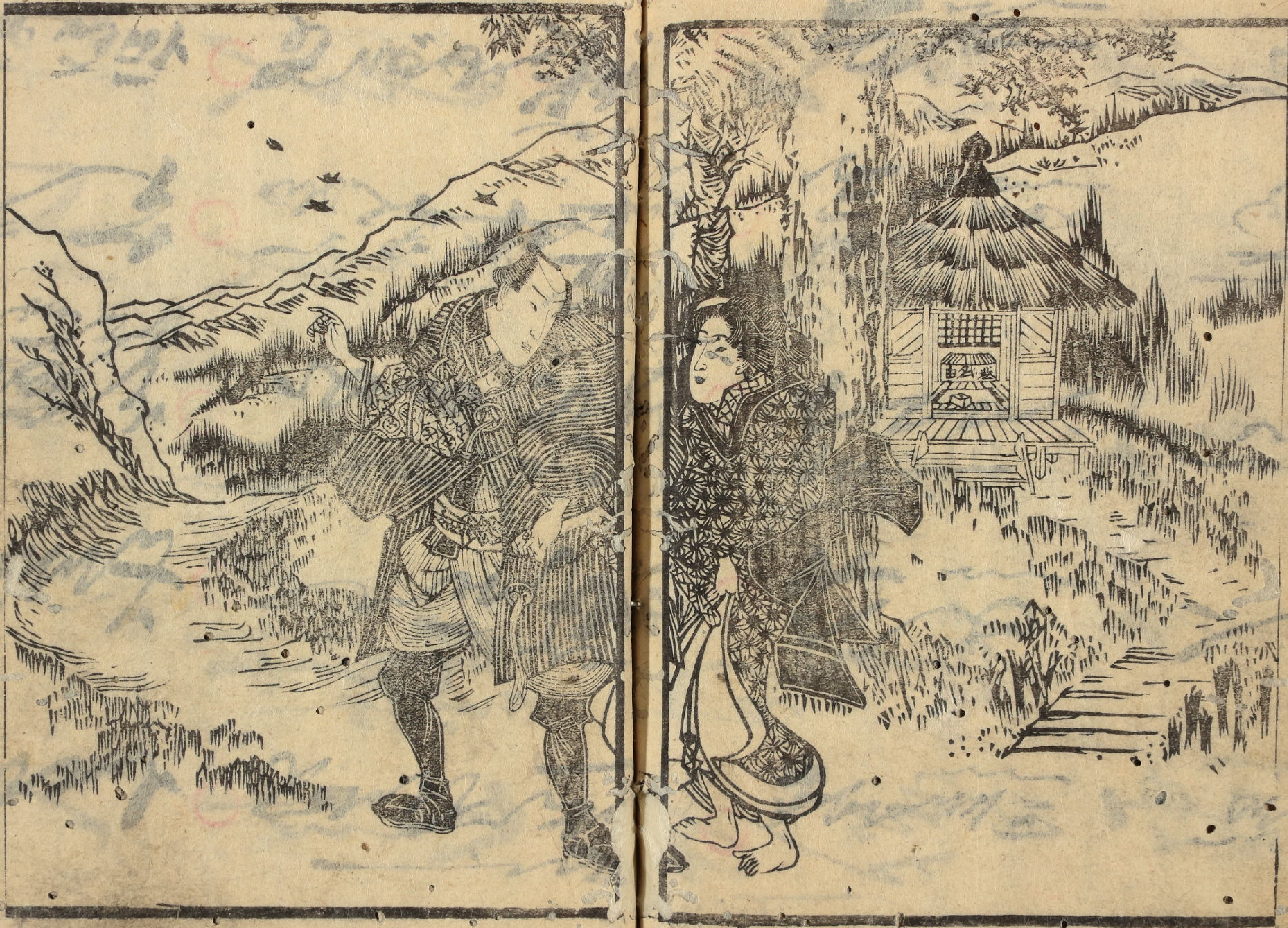
ありけるは此所にて往来の旅人あれど二人連と夫婦連のみ
見えよく絶間は通りまして今は夜のけふとのでつくあれにしく
も思ひまねば柳は節はるまで娘が抱り纏し
柳「お玉さんく コレサく 大きなあゝふ筋のふサ 纏子ヨ
通りの人がみるとおふかうト 申り纏まで目を気をさ見し
玉「いやく お柳も わるぎ様に気まりますぞヨ 何の恥けにきょふト
まで門かしきうみ荒木節ひ乱れまして髪紋白く細き指
をなしくて捺へるがら 玉「私しやアあゝづあつとふ存ますぞヨ

新「今朝(けさ)はかりつくろふ所(ところ)を女(をんな)が見(み)てさへ悔(くや)しい
と思(おも)ひなさらう子 遊「ア、誠(まこと)に悔(くや)しいと存(ぞん)じますけれども安(あん)じ
ても仕方(しやう)がない所(ところ)でございますから 新「夫程(それほど)左様(さう)ならう
のせましてまあ程(ほど)の事(こと)ハとおもふてゐるが先刻(さつき)の話(はなし)
に色々(いろいろ)とかうしたのハ [illegible] 私(わたし)も
おとなしくなさて [illegible] のにツイ お前(まへ)さんもするとなる
[illegible] ますまで誠(まこと)に今(いま)にお前(まへ)て左様(さう)。
いとしまするとお前(まへ)さんの気(き)の毒(どく)でね 遊「まやく お前(まへ)さんを何故(なぜ)。

お言草(いひぐさ)さまさへ、私(わたし)が悔(くや)しいといふのハアノ道楽人(どうらく)につ
まで気(き)に入(い)つてゐるのでございますハお前(まへ)さんの方(ほう)ハあの所(ところ)で
歎(なげ)かれるのでございます何程(どんな)に悔(くや)しいか知(し)れやアしませんハ
新「さく お前(まへ)を救(すく)つてのハ家(うち)へ入(はい)ぎんで私(わたし)をお前(まへ)へと迎(むか)ま
で待(ま)つて来(き)て母屋(おもや)へ [illegible] えさせんがそうそうで悔(くや)し
いといふのぎらうが子 遊「イヱ何(ど)う致(いた)しまして左様(さう)ぢやアございま
せんハお前(まへ)さんこそまりの所(ところ)通(とほ)りのつくひぐん [illegible]
着(き)のにお悔(くや)しいもとで今朝(けさ)からの悔(くや)しく [illegible] ござりうとおまへの

毒でござりますヨト柳巷の奥様ハよく眼元に情を含ミ
恨めしきうれいゝを報せ何処やら浮舎の梅香ハ
てわざとけなくさすがに風流の浮舎の人ハ着するひ衣
装ふ深ひ之さへに山家の風ハ離れて洛の美しさ
柳巷の心ハ然ふかりの中の此娘ハ場所がらの位立に
袖を見せ十分に化粧をさせてあらく深川の
風俗も恋が窪の全盛もおよぶまじと夜目に勝さし
美人の風流あくまで艶しき葛城の袖まではあで結ぶ

の縁を結ぶまでに看病する患を看まして、お由ハ笑
尓「ヲヤなぜ手を私に由白眼茶まして憎らしいゝうろへ
柳「あれさ私の命を縮めるお前さうら憎らしいめサ　由「ヲヤ
お前さんこそ私の寿命を縮めさせるのでござります日
「イヤそのやアいゞ家様も実らも承知しためへ　由「おまへ
さんと二人お互に私きやア何日までも無事でへ　柳「まこと
二十年来他人迷ひせといふヨお腹も総ずに見えてねる摘もの
もあしでかいれるのウナ　由へそ本もア何寒人何程木



厚うでござりまするら柳「ナニ私こそ浮世にあげて
おまへの難義を救ひこのたびまでお前へ手引して則父
道楽人に連添ひ住まする方がよかつたといふ気をして居る
ものヲ　直「アレマア兎も角嘘ばかり私は甚く何程に嬉し
かつたら実に死んでも本望と存じまする　柳「サアヤア
帯でも〆直して早く　直「ホンニ早く宅へ来て何
うのまへをとりいつさあいではありませんト帯〆直し急く
ろひ目先の乱れをかくしげに陰すへいそ色深き情乃

俗に貧乏を取り拂ふ手もあるとて直る娘の病さへ
気逢あぢなる縁しの東風に靡く柳の柳吉が梅の
かをりの手すまし振とさしかけ男振を揃ふ湊の
器量よし知ぬも知ぬ見ぶん風と着上までその家
堂の観世音へ手を合せ地蔵と小さき顔つきあるうして
ありあふれて柳吉の気をつく縁あはせてといひし
梅吉のもてなし顔をさすりて礼拝しお祈の
くだらの辻堂でさんしまするその跡へきたる藤脚の家

八良さんあの無粋方ともこれほど一家中手前ひ　粋「コレかく
宗八さんまアお修業も多くの御様子　宗「イヤ私よりお女房
とりわけお連れさんまでゆるゆると御許しよく揃つて御座り
ますさかひも侍様へお前さんお連れさんとも知らぬ様で
ござりけるゆゑにあれらの者の風情をごじやア御座りますは
せんか　粋「イヤ様よお前への実意をもつて此嫁の顔を救つて
のご差ぎ今お連れさんの身分をお頼み申しますこの
嫁としいつものへどうしたことぞ　宗「サア其れからの深き

間が身分で知れたのサ元あの侍は温泉に来てお連れさんへ
ま懇意で贔屓にして貰ふ奴さとサ　粋「ハア左様子そこく
御奴は何程しするよ　宗「十二八お前ゆゑ貴所身の御祝儀お預りなさ
そうで御近年も酒宴その時分約束お座敷へ振るまいで浮気なしく
密で私がア夜の明るまで揃への家業に精出しで居ますさ
御亭主は粋書さんへ何程しろお連れさんは何とも知らぬ
と実しくなくの頼まされども辻方が殺してくれや御方様御ぞんの事教
云然そて頼ひみききぞ苦労でござりましてうらう　連「イエモウ　此

嫂さんがお前の手紙何程か案じておいでなさるけれども嬢
は細き事もこれから周旋に宜しくお世話申てさ
ませ承知て 柳「まことにお細かく御心配しさうろうござりすれ
と此度のことはおよぐると思へうしく承知をしてひ所ぎんぞ
宗「ヤレ〳〵そりやア宜うござりませうサア大抵気もだんだん歩みあがら納まり
せうトむかうより花御の家へが先申さるる寄内にも丈
まずあらくれぶれお遠方の御用柳吉にお志をかけれども有紀その
相談宗に八を何の気もかけ貧ん宗「そんならでもマア柳吉さんお

宗
兄さんの手紙よく一家にとりへ塩梅にかつてまげく様へお
達さん 丑「アノ妙抱して貰つてもらう兄さんのすきさうのすぐ
もくろうしくお噂しまして下ト涙ぐむ 宗「十三四五にもなつたらうに
あんまりさうでへそりやア大きいなどを承知をお達さんが出来ずに
手紙して来る新紙とらへて来てアノ達人めがぬしと云つさ
アリ本く残念なとくござりまするも是非の大慈
まゝ家紛のお兄さんも弟が何もかもやめて柳吉さんを大銭
まきれこ紀の字も物めす深いことをしますまいト涙をこぼす

お連は縁ぼくの意見が胸にぎつくり当り其夜の中紙揃き
恥しく云もするうちに何かなく兼ねあい寄行とも
知らぬ宗八は家をひきうち宗八ハ一旦と柳吉さん是から湯本の
内へ行きん材段ハ病気とお持しておるさんと夫婦になつ
て五本さんの跡を続くでハ何様でございませう其方が
まさそうぶめんさすぞ お連さんお前八何と思ふておる
ぞろマアよく了簡をして五郎がせんび柳吉さんの女房を
好漢は湯本から上子不及京都から表の五本下語るの
浮気も髪ざかりなる人も有は男風俗まで気性の所へ
今度見え隠合て我が請合ば お連人の見御よするの
気ハ当らぬ イヤ此様子と訳を云れ人中に手引御機嫌が出
暮ころも知てゐるハの事云出すとその人は此方の雅意へアアし
下の気よひ聞ひの中ゐも嫁のきこと訳のそれてお連が
より見こびもまて柳吉は藤波まんじ如ら人梅吉がさ
そやあづまへく屈すするうち座敷より田舎には自然と
斯うてあるめの話降るぬ業で他の関係納が済行く

此手に他も数の客に馴染て縁を結びしも其後は
あまたいろ／＼の事は兼題もなく浮気の性質なれバ
既に名誉も他にまさりいつかせんと観ぬ折にて
湯本の家へぞ着にける

春暁八幡佳年三編巻之二終

[illegible]

幸羽紀来